

Title	荒畑寒村著 寒村自伝
Sub Title	An autobiography, by Kanson Arahata
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.6 (1961. 6) ,p.493(57)- 495(59)
JaLC DOI	10.14991/001.19610601-0057
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610601-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

問題が集約的に起るべき条件が備わっていたといえよう。

何よりも村の細民の内容は複雑であった。『ヴィニエロン』は不動産の所有者として最上位に位置した。この点ルブネル氏が観察したディジョンの場合と逆である。そこでは大部分の『ヴィニエロン』が無産者であった。しかし村の細民は領主の『ファルム』の拡大と共にその生活を圧迫され、二様に『マヌヴリエ』化してしまふ。村の細民は文字通りの無産者として同質化されてしまったのである。

村の細民の無産者化の方向は、すでに指摘した如く、領主制の變質過程の所産であった。領主が農民の保有地を買戻し、それを『ファルム』として再編する過程での所産であったのである。領主による『ファルム』の造成、それがどれほどの影響を持ったか。今や縷言を要しまい。しかしそれほど重要な『ファルム』についてその形成の過程がこれまでに正しく問題にされて来たとは思えない。筆者は別に機会を求めてこの問題に關説するであらう。

以上「一」、「二」、「三」の記述について必要な材料は Paris et Ile-de-France Mémoire, IX, 1967-1968. Paris, p. 156-282 から拾ったことを付記して筆を擱く。

書 評

荒畑寒村著『寒村自伝』

飯 田 鼎

著者は、本書の「あとがき」の最後に、つぎのように書いておられる。

「私は他年一日、有能無私の学究によって、文献資料がひろく渉獵探訪され、埋もれた史実を発掘し失われた連鎖をつないで、日本の社会主義運動史が完成されることを期待する。そして私などが身の程を省みず、烏滸のそしりを承知の上で著わした自伝も、その宏壮な建築に一個の素材を提供するぐらいの功はあるかも知れない。希くばその時期の一日も早く到来し、私の小さな望みが果たされんことを。」

人間には種々様々な生き方や貴重な体験があり、その限りでは人はすべて、それぞれの自叙伝をもつわけである。そこには、たとえばゲーテの「詩と真実」にみられるような詩的な要素が混入することもある。もさけることはできないとしても、作者が、社会上政治上の運動などに、何らか重要な役割を果たしたような場合には、とくに史料的な

訂正おわび

二月号、小池基之氏論文「資本主義における土地所有の一般的性質」中、「一二頁下段一二行目に、「B地における追加投資の生産性の低下の減少によって補われ、市場調整的生産価格は依然として3磅はこの超過利潤に止まりうるであらう。」とあるのを「B地における追加投資の生産性の低下はこの超過利潤の減少によって補われ、市場調整的生産価格は依然として3磅に止まりうるであらう。」と訂正します。校正の手違いをおわびします。

(慶応通信)

価値を有するものとなる。しかし何といっても自叙伝のもつ面白味は、作者の人間性、その思想が率直に語られることによって、読者の心奥に、ある種の情熱をかきたて、しばしば作者が遭遇したと同じような苦悶を意識せしめる点にあるのではなからうか。その作者が、あくまでも良心的に、最後まで自己の信条に忠実に生き抜いた人物であった場合には、われわれは、このことを強く感ずるのである。古今東西、文学史上にのこる自叙伝は、非常に多く、筆者が読んだものは甚だ少ないのだが、わが国の自叙伝のなかでもっともすぐれていると思われるのは、やはり「福翁自伝」と「河上肇自叙伝」である。前者については今更いうまでもないが、後者はとくに明治から大正そして昭和にかけての、いわば近代日本の暗黒な政治史とも関連があり、非常に興味深いが、しかし元来、学究者としての著者の潔癖さが、文章のいたるところに滲みでていて、万人むきでない感みがある。

これに反し、ここに紹介する寒村自伝は、明治三〇年代にはじまる反戦平和運動に参加して以来、現在に至るまでの六〇年になんなんとする日本社会主義運動を、みずからこれに参加した実践者としての立場から物語る大作である。著者はすでに自伝的な著作を多く書いておられるが、この自伝は、従来のものを集めて完成した五六〇頁の大冊で、容易に読了を許さない。前篇と後篇とにわかれ、前篇は旧著「ひとすじの道」に筆を加えたもので、主として大逆事件に終る明治社会主義運動から、第一次世界大戦の末期、ロシア革命

の頃までが物語られている。後篇は、それ以後、敗戦後の片山内閣までの期間について、非常に詳細にそして生き生きと語られている。

一大史料集ともいふべき本書は、いやしくも日本近代史に関心を有する者の、必読文献であり、これを批判するなどということは、非才な筆者のないうところではないが、ごく簡単にその内容を紹介し、あわせて読後感を記すことによって、わずかに責を果したいと考える。

一、空想少年の生い立ち、二、週刊『平民新聞』、三、日刊『平民新聞』、四、大逆事件前後の運動、五、社会主義運動の復活の五章からなる前篇は、日本社会主義運動の黎明期にあたり、幾多の興味あるエピソードや事件が注目をひく。日露戦争勃発に際しての平民社を中心とする社会主義者の有名な反戦運動をはじめとして、初期のキリスト教徒を想わせるような社会主義伝道行商の苦難は、読む者の心を打たずにはおかぬであろう。「伝道」という言葉に象徴的にみられる宗教的・殉教的ともいふべき情熱が、当時の著者の胸のなかに燃えて、その行動を支えていたのである。ただこうした運動が、いわば少数精鋭者の運動であって、その背後に組織された大衆をもたなかったことが、致命的欠陥であった。そしてその矛盾は、明治四十一年の社会党大会における硬軟両派の理論的抗争、「直接行動か、議会政策か」のはげしい論戦となつて拡大された形であられたのであった。これについて著者は、つぎのようにのべている。「今から顧みれば、この直接行動はさぶる非現実的・観念的であ

った。幸徳氏は、労働者が手を拱ねて数週もしくは数月、ゼネストに出れば革命すなわち成るようにいったが、これを行う主体的条件——労働者階級の組織は当時、ほとんど皆無というも過言ではない。従つてまた、労働者の階級的意識も未熟であったことは、大会で選出された新評議員二十名のうち、一人の近代産業労働者も加わっていないのが何よりの証拠である。」

これはまことにもつともな意見で、当時の社会主義運動の主流がアナキズムであつたことの直接的な結果であつた。明治三〇年代初頭の高野房太郎等による労働組合運動が衰えたのちの片山潜等の努力と、幸徳等の思想と行動とが、まったく相反する方向に走つたという事実のなかに、日本社会主義運動の悲劇の様相が伏在する。ところで後篇であるが、一、第一次共産党結成の内情、二、チタ滞在の八日間、三、シベリア鉄道旅行記、四、歴史的な三大集会、五、モスクワの見聞、六、同志の検挙と大震災、七、第一次共産党の解散、八、『労農』十年のたたかい、九、太平洋戦争の四年間、十、社会党を脱党するまで、の十章から成つており、前篇において、社会主義運動における思想的戦術的な問題が中心をしめていたのに対し、コミンテルンとの連絡のためにソヴェートの訪問とこれにまつるエピソードは、本書のなかで、もっともロマンティックな文学的部分であり、まことに捨てがたい魅力をもっている。しかし共産主義インターナショナル支部としての日本共産党の建設への著者の努力にもかかわらず、隣共産党事件にみられたような日

本の指導者の理論的混乱は、ついに山川均の解党主義となつてあらわれ、その間の経緯についての著者の批判はまことに鋭く、当時の日本社会主義運動の一断面、その脆弱な側面を備いて余すところがない。大正十三年、解党が正式に党の議題としてとりあげられるに至つたとき、これに対する著者の批判は、つぎのような一節に明らかであり、当時の苦悩を思わせる。「彼らは一体、これでどうしようというのだろうか。個人的に大衆組織に加つて、大衆運動の発展に努力する——そんなことは改めていわないでも、もとより共産党員の義務ではないか。だが、何の中心も統一もない個人的な運動から、果して有力な党組織が生まれるであろうか。もし生まれるとしたら、それはまず個人的な小グループであり、それが相集まつて組織した党であつて、これではまったく切角解散したセクト主義集団の拡大再生産に過ぎないであろう。さもなくば、大衆運動さえ発達すれば、共産党は水溜りの中のボウフラのように、自然に発生する

つていた。私は山川君の高邁な見識、大胆な主張に深甚な敬意を払うものであるが、しかし社会主義は、『大衆的な労働組合運動』や『大衆的な政治運動(いわゆる無産政党の運動)』とは、別個の目的を有しているはずであつて、社会主義者が労働者階級の大衆的組織に加わり、その運動に献身努力することは、社会主義運動を、これらの組織の中へ解消してしまうことではあるまい」(四五九頁)。

本書を読んで、もっとも強く感ずることは、著者が終始一貫して青年のような若々しさと純真さとを失わないことである。自叙伝には、ともすればともないがちな虚構や誇張、あるいはペダンティックな表現がみられず、あらゆる艱難も奪うことのできなかった情熱が溢れているのを感じしめる。そして堺利彦にたいしては、限りない敬愛をこめて語っているけれども、ともに活躍した同僚先輩にたいする感情的な対立意識はほとんどみられないのは、著者の人柄を偲ばしめる。

われわれは、日本社会主義運動史にかんするもっとも興味ある文献として、本書を推奨するものである。(一九六〇年・論争社・五六五頁・一二五〇円)

——一九六一・三・一九——